

# 文明という

## もろい果実

—その起源と行方

山崎正和 + 田所昌幸



『世界文明史の試み——神話と舞踊』  
山崎正和  
(中央公論新社、2011年12月、488頁)

本誌69〜75号に連載された

劇作家・山崎正和氏の「神話と舞踊」が、この度、

『世界文明史の試み』(中央公論新社)として刊行された。

この野心的な論考について、

アステイオン編集委員会委員長・田所昌幸が聞いた。

### ■「ある」身体をめぐる

**田所** これまで先生の書かれるものは簡潔で引き締まった筆致が印象的でしたが、この度の本は内容がとても多岐にわたり、量的に大部ですね。「山崎劇場」の芝居を観ているようでした(笑)。

**山崎** 初めは近代化論を書くつもりでいたんです。それがだんだん考えを深めるうち、近代的人間像、理性や言葉、意識の形成まで関心が広がっていき、あげく人類の始まりまで及んでいきました。

**田所** 歴史は面白いエピソードに溢れていますからね。さて、内容豊富な本書ですが、私がとりわけ何度も立ち返ったのが「ある」身体と「する」身体についてです。ごく大まかにいえば前者が自己確認的、非功利的なものに対し、後者が対他的、功利的といったところでしょうか。私のように社会科学を学んできた者からすれば「する」身体についてはよくイメージできるんです。たとえば、安全保障とか経済成長とか、了解可能なはっきりしたゴールがあつて、どのような手段を組み合わせ、どのように問題

に対処しながら進んでいけばいいかを考えます。他方で、「ある」身体はというと、社会科学ではあまり明示的には扱わないと思うんです。

**山崎** 政治学でいえば、権力と権威の区別がわかりやすいかもしれませんが。いかなる政治権力(「する」身体)といえど物理的な力だけでは支配がおぼつかない。どれほどの独裁者でも夜は寝なくてはいけませんから(笑)。そこで、その支配者が「ある」ということが重要になる。その人がまとう、能力とは無関係な権威というものがあるからこそ秩序が成立するんですね。これが社会科学的な「ある」身体です。本書で挙げた例ですが、王権神授説と同じく天賦人權説も人間の「ある」身体に立脚するといえるでしょう。能力や寿命に関係なく、旺盛に働く若者にも、いつ死ぬかわからぬ寝たぎりの老人にも、等しい人權が与えられるということですね。経済の分野でも、たとえば財産も債務も「ある」身体に属している。もちろん、「ある」身体と「する」身体は相互に無関係ではありません。人間が何かを「する」際には「ある」身体のレール上を、いいかえれば慣習に乗って走っていると考えればよいでしょう。

**田所** なるほど。本書でも扱っていますが、「ある」身体についてはホビー(趣味)としてのスポーツを想起するのがいいのではと思うんです。ともかく自分の身体があり、それを使うしかない。ジョギングしていると、誰に褒められることも賞金を獲得することもないけれど、「昨日よりは長く走れたな」とか「タイムが少し縮んだな」とか手ごたえや充実感が得られます。むしろそれがほぼ全てでしょう。

**山崎** 「する」身体であつたら、ただちにジョギングをやるめて自動車に乗ることを考えますね(笑)。

**田所** こうした「ある」身体、「する」身体にも関係するのですが、先生の意識論はだいぶ身体に立脚したものにように思います。ここが私としては印象的でした。

**山崎** 近代啓蒙主義以後の哲学者というのは、意識といえば人に「先験的に」備わっているものとする傾向にありました。カントなどは、なるほど、先験的としかないようのないものをいくつも例示したわけです。しかし一方で、考古学や人類学には、人の意識がこれまで永遠にあつたとはいえず、歴史の中で形成されてきた産物だとする見解があります。こうした双方の見解を総合したいと

いう疑問すらあつたと思うのです。この本を読んで、我々が人間文明の基礎だと深く信じている、たとえば理性や人格といったものですら、実は非常に危うい土台の上に載っているんだなと改めて思いました。

**山崎** われわれがとても堅固だと思つている文明は、実は人間が、あたかもタイトロープを渡るようにして創つてきたものだというのが本書の一貫した議論です。しかしそもそも文明など脆弱なものだから「どうでもいい」とか「ゼロからやり直そう」などといわないのが、私の立場です。だからこそ大事にしていこうと思うのです。

### ■キリスト教と科学——近代へ

**田所** 昨今の学問的な傾向では、西洋中心主義が批判され、西洋近代の意義についてもそれを相対化する方向が強いように思います。しかしこの点に限れば、先生はいわば伝統的で、西洋近代に人類史的意義を与えていますね。ただし、この近代の捉え方に特徴があるようにして、本書は西洋近代を逆説に溢れたものとして描いています。「雑種強勢」という生物学の概念を用い、ヘレニズ

という思いが私にあつて、本書では言語の発生と意識の発生を絡めて論じました。

**田所** 私が、先生の意識論を読んで思いだしたのは、いわゆる「野生児」というケースです。子どもとき動物に育てられた人は、後になって人間の世界にうまく入っていけないといわれます。生物学的にはまったくヒトであるにもかかわらず、言語能力や普通人間的といわれる情緒も発達せず、おそらくそういった人たちには我々の考えているような意識は育ち難いのでしょうか。

**山崎** そうですね。人間本来の身体能力とされているものは、案外、成長しながら得る教育の産物でしょう。これを本書では慣習と呼び、人間が先で慣習が後、ではなくむしろその逆、人間は慣習のなかに生まれ落ちるのだと議論しています。

**田所** こうした議論に触れていくうち、一五世紀末以後スペイン人が初めて南米に足を踏み入れたときの緊張感を想像しました。異なる文明に住まう者の「最初の邂逅」(first encounter)の結果、おそらく残酷な行為が先住民に対して行われたのは事実ですが、ヨーロッパ人にとつても、「そもそも彼ら(先住民)は人間なのだろうか」と

ム時代、キリスト教やヘブライ主義など、ときに相剋する多種多様な要素で溢れた西洋文明の形成を評価しています。いわゆる中世をみても決して停滞の時代ではなく、雑多な政治主体が相互作用をくり返す中で、キリスト教的な潔癖な精神とギリシャ的な合理主義が結びついて、世界を解釈しつくそうというほとんど偏執的な知的衝動を生んだというのが、先生のストーリーでしょうか。

**山崎** 本書では「ある」身体と「する」身体に依じて、人間の世界観も二つに分けました。「世界閉塞」と「世界開豁」です。「する」身体のほうは世界を無限に開かれたものとして活動します。かたや「ある」身体のほうは、世界には限界があつて、われわれはこの中に閉じこもって生きるしかないという観念を持つていて、神話や宗教はこちらから生まれたものです。こうした二つの考え方は全人類にみられたものですが、いわゆる西洋文明だけが特殊な方向、すなわち近代化の方向に進みはじめた。ヨーロッパでは雑多な要素が混在するなかで独特のエネルギーが育まれたといつてよいでしょうね。その際無視できないのは、「諸国並立」(E・L・ジョーンズ)という政治的な事実です。われわれとは別の国が他にもあるという事実



Masakazu Yamazaki

1934年生まれ。劇作家。京都大学大学院美学美術史学専攻博士課程修了。関西大学教授、大阪大学教授、東亜大学学長などを歴任。文化功労者。

をヨーロッパの人びとはよくわかっていたんです。

**田所** アジアはといえば……。

**山崎** アジアで、世界は諸国が並立しているものだと考えたのは日本だけです。中国や朝鮮、ベトナム、タイなどにとって世界は一つでした。文明の下、いくつかの野蛮国ないしは属国があると考えていた。日本人だけは、海に囲まれていたおかげで、そうした観念からは離れていました。むしろ、自国よりよっぽど立派な国があると考え、そこから文明の諸要素を輸入するに努めたんです。「片思いの諸国並立」観とでもいいかもしれません。

**田所** 周辺国はちつとも日本を意識していませんから、日本の勝手な思い込みだったわけですね。

も言及されていましたが、中国では漢字や古典のリテラシーに長けた官僚が圧倒的な権力を掌握していました。彼らによる統治システムは、異民族の襲来と支配(元や清)の下でも揺らぎませんでした。

**山崎** そういう社会の場合、技術さえ要求水準を満たすと、その他に悶え悩むことはほとんどないんです。火薬を作る、紙も地図も作る。そうして統治上の目的が達成されれば、それ以上実利的に無駄なことに思考をめぐらす必要は薄いと。

**田所** むしろ統治の邪魔になるような妙なことを考えるよりかは、知識人は文章を書き、詩を吟じているということでしょうか。本書でも印象的ですが、実利と無関係



Masayuki Tadokoro

1956年生まれ。慶應義塾大学法学部教授。京都大学大学院法学研究科中退。姫路獨協大学法学部教授、防衛大学校教授などを経て現職。専門は国際政治学。

**山崎** はい。でも、実はそれが日本の近代化が早く達成される要因の一つになったと思います。ともあれ、古典以来のヨーロッパの「雑種強勢」が、結果的には発展への大きなエネルギーを生んだのは確かです。たとえば、神々が並立していた古典古代の精神世界に、一神教のキリスト教が持ち込まれると、ややこしいですよ。それに輪をかけて、「三位一体」の下、一神教のはずのキリスト教には三つの神がいるという。頭のなかで混乱するのは当然です。

**田所** つじつまが合いませんが(笑)。

**山崎** けれど、そのつじつまを合わせるために、殉教者らは文字どおり命がけになりました。ただ「真実」というもののために命がけになるというのは、他の文明集団ではあまりみられないことでした。私にとってキリスト教の三本柱とは、殉教精神、異質の宗派間での論争、そして組織的統一ですが、統一を目指して理屈に合わないものに理屈をつけようと腐心した結果、世界を解釈・説明する原理が編み出されていき、科学的精神が生まれていったんですね。

**田所** これは、中国文明とは対照的な側面です。本書でなことについても「なぜ」と問う衝動が、ヨーロッパの文明には色濃かったように思います。

**山崎** ええ、その基はキリスト教です。キリスト教の大きな神話構造の下で、それと相反しないように上手な論理を組み立てながら、科学は別の世界観をつくっていつてしまったわけです。そんな手のこんだ芸当は、他の大文明には必要なかったんです。ここで、眼を日本に転じてみると、幸か不幸か「偉大な文明は外から来る」といった認識がありましたから、中華文明に代わって西洋文明にもすんなり適応できたように思います。

**田所** 日本はどう見ても世界の中心ではなく、周辺のだという自己認識がありますから、それが外から学ぶ気運につながっていたのでしょう。

**山崎** その中で、物質文明のみならず知識や仏教思想なども幅広く吸収していききました。一つ面白い話があります。一六世紀、日本にやってきたイエズス会の宣教師が愚痴るんです。日本の坊主曰く、「キリスト教は永遠、普遍というが、だとすれば、あなたが布教に来る前、私がキリスト教について知らなかったのはおかしいじゃないか(笑)。かのイエズス会士も困ったでしょう。もち

ろん、ひとたび理屈で説得されて改宗した日本人は、殉教も厭いませんでした。こうしたエピソードをふまえてみても、ヨーロッパ近代を日本がうまく受容しえた理由がわかる気がするんです。

## ■日本と「世界文明」のこれから

**山崎** ヨーロッパ文明を基とする、今日までの「世界文明」化のプロセスは、歴史上一回しか起こらないある種の奇跡だと思っただけです。それが二〇世紀後半から二一世紀にかけて世界を席卷しているのが現状です。けれど、本書でも書きましたが、その中で皮肉な結果が生まれつつあるのも事実です。科学が発展するにつれて、人間がちっぽけなものだとはつきりわかってしまったんです。

**田所** 世界を解釈しつくすつもりだったのが、科学の進展につれて世界はますますわからなくなり、制御不能となり、人間がちっぽけだということがはつきりしました。それに合わせ、科学も学問も、はてはホビーも専門化や細分化が著しく進行しています。かといって、本書の議論のとおり、この「世界文明」化の流れは覆すことができ

ません。そこで、先生はこの流れが今後どうなるかみていますか。

**山崎** 私としては、今後は「進歩主義」の樂觀なき近代化が続いていくだろうと思います。イデオロギー的樂觀なきの、現状改善ですね。

**田所** 進歩はするけれど、進歩の実感がないような社会ですね。日本についてはどうでしょうか。

**山崎** 日本の経済が暗いとはいえ、アメリカの失業率(九%台)の半分くらいです。もちろん経済力にはばらつきがありますが、あくまで大まかにいえば、アメリカや中国ほど極端な不幸が目に見えません。平均していえば、きつと日本社会のほうがましでしょう。いま一つ指摘しておくべきは、日本人の特殊な無常観です。一九九五年の阪神淡路大震災から昨年の東日本大震災まで一六年空いています。大半の人が一続きでこれら二つの地震を捉えているでしょう。さらに、地震学の教えるところでは、いつ東京や東南海地方に大地震がきてもおかしくない。だとしたら、「三・一一」をきっかけに日本人に無常観がますます広がるかもしれません。運命について考えるようになり、案外何らかのかたちでの信仰が広がるか

もしれない。その場合、「今日一日、地震にもあわず、無事ですごせました」といった程度の、現世利益的な信仰でしょう。もう一つの可能性としては、いわば積極的無常観です。鴨長明の『方丈記』(鎌倉時代)からしてそうですが、無常だからこそ逆に今日を精一杯がんばろう、好奇心旺盛にすごそうといったメンタリテイです。

**田所** 確かにそうかもしれませんね。他方でアメリカをみると、まだまだ自己拡張的メンタリテイに溢れているようです。ヨーロッパや日本が経験したようなポストモダンの懐疑といった側面が希薄です。「Yes We Can」の世界で、依然アメリカンドリーム of 素朴な出世観を抱きながら生きようとする点が非常に印象的です。

**山崎** アメリカに比べると、日本人の無常観は際立ちますね。ただ、誤解していただきたくないんですが、無常観は現世を否定する無気力や利那主義的な自暴自棄とは違います。たとえば明日、東京直下型地震が起きたとしても、もちろん並大抵の被害ではすまないでしょうが、日本人は「何とかやっつけていく」という意味で、きつとそれを乗り越えると思うのです。

**田所** その、「何とかやっつけていく」という側面を積極的に

意義づける精神が、今日の我々に非常に求められているように思います。最後に、「世界文明」化にあたってのグローバルな課題についてお聞かせ下さい。

**山崎** 本書の最後では、これまでの近代化の果実の「パッチワーク」(つぎはぎ)以外に「世界文明」の将来はないだろうとしています。あくまでそれは「パッチワーク」です。ですから、かつての西欧が育てたロマンチックな啓蒙主義がもはや成立しないのはいうまでもありません。今後の国際的な課題を一つ挙げておくとすれば、極端な格差の解消ですね。社会に生きる人間に差があるのは当然なのですが、あまりに極端な格差は、一国内でも、国際的にも改善していかねばならないでしょう。アメリカや中国の金持ちがたいへん豪華な生活を送っていることを、裸足で歩くアフリカの貧者が知る——こうした小さなエピソードが一つひとつ積み重なっていくと、社会的にも国際的にも危険でしょう。

**田所** 本書の議論を敷衍した続編への期待がますます高まります。ありがとうございます。